

がん看護専門看護師としての活動

新井 敏子（東京都立駒込病院 がん看護専門看護師）

2005年にごん看護専門看護師の認定を受け、丸2年が経とうとしている。私が勤務する都立駒込病院はがん拠点病院である。そのため、相談支援センターの相談業務、緩和ケアチーム（加算が取れていない）活動が主な仕事で、他にがん看護の教育や研究のサポート、がん看護分野で活動する認定看護師の活動支援や緩和ケア委員会のリーダーといった役割を担っている。外来を含めて病院全体を1週間で1回はラウンドできるように心がけている。

がんは早期発見により治癒することも多くなった。しかし、病気の特性から、患者は「再発・転移」の不安を持ち続けている。また、発見時がすでに進行がんの状態であったり、治療を受けても再発・転移してしまう場合もある。

がん患者はがんと折り合いをつけ、自分のありようを模索し、希望を持ち、時には先の見えない不確かさに揺れながら生活している。生きている場、生活の質（QOL）こそががん患者にとって重要であると思う。がん患者はそれぞれの価値観の中でがんを持って長い時間を生きぬいている。がん看護を考えると、その患者が長い経過の上に立っていることを踏まえ、何を大切にしている人なのかに心を配る。生活者としてのその人は、身体的、精神的、社会的、霊的に安寧といえる状態なのだろうか？ どうすれば少しでもQOLが向上するのだろうか？ と考える。

CNSとして活動しながら、今まで十分に理解していたはずのことが、あるとき突然、自分の理解の狭さに気付くことがある。あまりに不十分な理解で実践に活用できず周囲の人に伝えられない自分に愕然とする。改めて本や資料や文献を読み直し知識を再構築し、看護を実践し患者や看護師と話し合う。これをくり返して以前より深く広く理解できるようになる。これが私のための「看護の探究」と言えるのかもしれない。

私にごん看護の相談をしてくれる現場の看護師たちは、患者の良き理解者であり、ケアの提供者である。そんな看護師を私は常にサポートできるCNSでありたい。

CNSとしての私の課題は「がんをもって生きる患者をどう支えるか」である。今後も現場の看護師と共にがん看護の質の向上に努め、がん患者に少しでも満足してもらえるような看護の提供をしていきたい。